

日本に於けるショパンの受容について (1) 川染 雅嗣



2022年9月から23年2月にかけては、ショパンとともに歩んだ月日だった。ある音楽事務所からの依頼を受けて、「なぜ日本人はかくもショパンが好きなのか」という題名のレクチャー・コンサートを、川崎、秋川、浦安の各市で行ったのである。

確かに日本ではショパンが常に人気作曲家の上位に位置しているし、誰もが彼の作品には親しみを抱いているだろう。しかし、そのショパンの音楽がどのようにして明治以降の日本で受け入れられていったのか、ということについては深く考えたことがないのではないかと。それは裏を返せば、それほどまでにショパンの音楽が日本人の生活の一部のようになっているのではないかと考えられるのである。そこで、当たり前となっていることを深掘りしてみたくなった、というのが本来の意図である。時々私の天邪鬼がふと顔を見せることがあるのだ。

このテーマに関する先行研究は数多あるが、その中でも秀逸なのが多田純一氏による『日本人とショパン』であろう。筆者の講座の内容もこの論文に負うところが多々あった。レクチャー・コンサートは通常前半に講座を行い、休憩を挟んで50分程度のコンサートを行うというのが、私の流儀になっている。前半の講座のためにいつもレジュメを作成して、来場者に配布している。特にコロナ以後は紙媒体からの感染を恐れて、パワーポイントを使ったスタイルに変化してきたが、私は旧石器時代の人間なので頑なに紙の資料を配布している。

音楽取調掛・伊沢修二

そのレジュメ作成のために調べてみると、実に面白いことがわかってきたのである。話は1879年にまで遡る。この年音楽取調掛が設置され、西欧流の音楽教育を本格的に進めていく。中心になったのはアメリカで音楽教育を学んだ伊沢修二という人物である。この機関は1885年に音楽取調所と名

称を変更し、やがて1887年に東京音楽学校に発展していく。初代校長はやはり伊沢修二である。

ではここで、何故日本は西欧流の音楽教育を国を挙げて行わなければならなかったのかを考えてみよう。時は1853年である。浦賀沖にペリー率いる黒船が4艘やってきて、徳川幕府に開国を迫ったのである。この事件以後日本は泰平の世から動乱の渦に巻き込まれ、ついに鎖国を解き、その上不平等条約まで締結してしまったのである。ここが全ての出発点になり富国強兵、殖産興業を推し進めていき、欧米列強と肩を並べようと艱難辛苦の日々が始まったのだ。その一環として文明開花があり、音楽も西欧流の音楽教育を輸入してくることになる。岩倉使節団の一員として渡欧した伊藤博文が、リストの演奏を聴いて感銘を受け、「彼を日本に呼ぼう」と言ったとか言わないとか、殆ど都市伝説に近いエピソードもある。余談だが、ペリーがやってきた年にスタインウェイ社がニューヨークで創業されている。

さて、前出の論文によれば、日本に於けるショパンの受容には二つの大きな要因が考えられるという。一つはミッションスクールでの音楽教育、もう一つは澤田柳吉というピアニストの存在である。

明治になって日本には多くのミッションスクールが開校された。その多くは女子の教育を中心としたものだったが、同時に音楽教育を行う施設を併設しているところも多かった。このような施設ではピアノの個人レッスンなども行われ、教材としてショパンの作品が取り上げられることも多かったようだ。(続く)

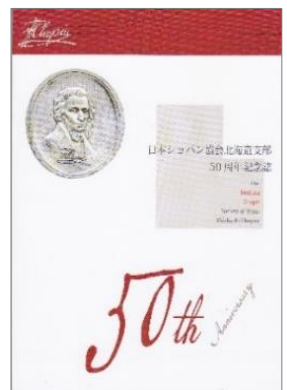
(かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授、会員)

〈後援〉 川染雅嗣ピアノリサイタル in アルテピアッツァ美唄 Vol. IV 小品の森に分け入る～石の声を探し求めて、安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄アールスペース、2023年10月1日(日) 開場13:30 開演14:00、連弾客演: 柝原享子、入場料: 前売り2,000円(当日券2,500円) お問合せ(柝原)090-2076-0487



〈後援〉 日本ショパン協会 北海道支部創立50周年記念コンサート、札幌コンサートホール Kitara 小ホール、2024年1月28日(日) 開演14:30、入場料3,000円、お問合せ(カワイ札幌)011-231-8661

=右図=日本ショパン協会北海道支部創立50周年記念誌 2023.5



日本に於けるショパンの受容について (2) 川染 雅嗣



本稿では澤田柳吉というピアニストに絞ってその活動について考えてみたい

日本最初のショパン弾き・澤田柳吉

澤田柳吉(以下澤田)は明治19(1886)年3月19日に東京・神田に生まれている。父親は歯医者を生業としていた。澤田家は他に土地も所有しており、比較的裕福な資産家の次男として不自由のない少年時代を送っていたようだ。ピアノにいつ目覚めたかについて詳細は分からないが、ともかく明治35(1902)年に東京音楽学校の分教場の選科に入学している。そして翌年同校本科器楽部1年に進学、同期には将来を嘱望されながらのちにウィーンで自殺する久野久子や、日本の音楽教育界の重鎮となる小松耕輔がいる。在学中から積極的に演奏活動を行い、特にショパンの演奏で秀でたものがあり、評論家からも高く評価されるようになった。所謂ショパン弾きとして一定の名声を得るようになっていったのである。しかし、彼の音楽家としての活動をざっと見渡してみると、一概にショパン弾きというレッテルを貼れないほどに、その活動は多岐に亘っているのである。

まずショパン弾きとしては明治45(1912)年に日本人で初めてソロリサイタルを開催し、しかもオール・ショパンというプログラムで臨んでいる。これは快挙とも言うべき出来事である。日本人なら誰でも知っている〈幻想即興曲 嬰ハ短調 Op.66〉を得意としており、日本での初演者とも言われている。

また、明治42年から1年間、台湾総督府国語学校で音楽の教師として勤務している。この人事には音楽取調掛設立に尽力した伊澤修二が関わっているらしい。

大正4年(1915)には、日本からサンフランシスコに向かう客船の船上楽士として4度乗船し、ほかのメンバーとともに演奏している。ここではクラシック以外の音楽との出会いがあったであろう。また大正7(1918)年には浅草オペラの世界とも関わっているのである。

澤田の活動で特筆すべきは〈調和楽〉という新し

いジャンルを創出し、作曲・演奏活動を行なっている点であろう。これは、既存の邦楽作品のメロディーに西洋音楽の和声を応用したハーモニーを施した音楽である。澤田は学生時代からこのジャンルに取り組んでいた。卒業後もそれを続けて多くの作品の楽譜が出版され、レコードにも吹き込まれている。現在は音源をリマスター編集したCDでそれらを聴くことが出来る。このジャンルは当時既に賛否両論あり酷評する評論家もいたが、西洋人には案外好評であったらしく、楽譜を買って求めて故郷に持ち帰る人もいたらしい。

関東大震災後は大阪に移り住み、大阪市立盲学校に職を得る。昭和6(1931)年には専任教員となっている。その地で昭和11(1936)年9月16日に脳溢血のため没している。50年という短い人生ではあるが、黎明期の日本音楽界を駆け抜けた才人であったと言えるだろう。

澤田の人生を別の角度から見ると、それは今もこの業界に多く存在するフリーランスの音楽家の生き様に重なるところがある。穿った見方だが、大阪以前は専任職を持たなかった澤田は、収入になることなら何でも引き受けていたのではなかろうか。それが結果として多様な活動に繋がっていったと感じるのは私だけだろうか。ただ、澤田はショパン弾きと一言で語ることが出来ないほど進取の気性に富んだ、当時稀に見るマルチタレントであったことは誰も否定し得ないのである。

(謝辞)本稿(1)(2)は以下に多くを負っています:多田純一著①『日本人とショパン〜洋楽導入期のピアノ音楽』アルテスパブリッシング、2014=右図= ②『澤田柳吉〜日本初のショパン弾き』春秋社、2023=左図=——記して感謝申し上げます。



(かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授)

講演会「カティンの森事件とシベリア抑留」 2024.5月または6月企画!



■井手裕彦■
『命の嘆願書』より
〜カティンの森事件と小林多美男氏の生涯

「カティンの森事件」&「シベリア抑留」関連をテーマに
新会員ふたりによる講演会

本号 4, 6 頁をご参照

■建部奈津子■
シベリア抑留体験記から



日本に於けるショパンの受容について (3) 川染 雅嗣



過去2回の連載では明治期に於けるショパンの受容について述べてきた。ここではショパン研究者の多田純一氏の論文や著書を参考にして、ショパンの受容についてそのおおよそのところを読者諸氏にご紹介した。*

澤田柳吉という日本で初のショパン弾きと言われた人物にも言及してみた。おそらく、ショパンという作曲家はあまりにも身近過ぎて、その音楽がどのようにして日本に輸入され定着していったかについて、考えたこともなかったというのが正直な感想ではなかろうか。気がついたらいつも自分のそばに寄り添っていたのがショパンなのだ。

日本人の情緒とショパンの音楽

今回は少し趣向を変えてみたい。前回までのようなやや学術的な話題ではなく、日本人の情緒とショパンの音楽の関係について書いてみたい。

皆さんはこんな噂を耳にしたことがあるだろうか。ポップスや歌謡曲の名曲の中には、クラシックからその旋律を拝借したものが多々あることを。その例をいくつか挙げてみよう。

1. ドラマ「北の国から」のテーマ音楽

これはさだまさし作曲で、ドラマの冒頭に流れるいわばメインテーマだ。歌詞はなくスカットで歌われるのがこの曲の特徴だ。この原曲はL.v.ベートーヴェンの声楽曲“*Ich liebe dich*”だ。さだ自身が意図してベートーヴェンから借用したのかどうかは不明であるが、リズムやメロディーの動きに若干の違いはあるものの、とてもよく似ている。

実はもう一つの候補曲がある、それはW.A.モーツァルトの〈ホルン協奏曲 第1番 第1楽章〉の第1主題という説だ。こちらもよく似ている。

2. ヨドバシカメラのCMソング

テレビでお馴染みの曲で、1975年から店頭で

流れているというから驚きである。元歌はアメリカ南北戦争当時の愛唱歌(リパブリック賛歌)。ロシアの作曲家A.グラズノフも自身の〈勝利の行進曲 Op.40〉にこのメロディーをモチーフとして用いている。

3. 牧美智子の〈わたしのギャラリー〉

これはW.A.モーツァルトの〈交響曲第40番 第1楽章〉の冒頭の主題をそのまま使っている。潔くらいである。これはもうカバーと言っても良いだろう。サビに入ると変化していくのだが、ここまで大胆にクラシックを使った作曲の高田弘も大したものだ。1977年の作品である。

すっかり前置きが長くなってしまったが、ここからいよいよ本題に入る。

松島つねの名曲〈おうま〉

ではショパンの場合はどうなのだろう。

皆さんは松島つねという作曲家をご存知だろうか。1890年に生まれ、1985年に没している。彼女はここで話題にしている澤田柳吉より4年後に生まれ、同じく東京音楽学校で学んだ作曲家・ピアニスト・ピアノ教師である。

彼女が残した名曲に〈おうま〉がある。誰でも知っている曲だ。この曲の冒頭部分はショパンの〈練習曲 変イ長調 Op.25-1〉にそっくりだ。一度聴いてみて欲しい。だがこれはまだ序の口で、実はまだまだ先があるのだが、今回はここで字数が尽きたようだ。次回は更に興味深い例をご紹介し、若干の音楽的・心理的分析も試みてみたい。(つづく)

(かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授)



新刊
紹介

現代ポーランド音楽の100年 ～シマノフスキからペンデレツキまで～

グヌータ・グヴィズグランカ (著) 白木太一、重川真紀 (訳)

音楽之友社 2023.12

ショパン以外に我々はポーランドの作曲家をどれだけ知っているだろうか。音楽に詳しくれば、シマノフスキやルトスワフスキ、ペンデレツキなどの名前はなじみ深いだろうが、本書にはこれらのほか、おそらく音楽関係者にもほとんど知られていない作曲家がたくさん登場する。「現代ポーランド音楽」とタイト

ルにはあるが、現代のみならず、かなり古い時代からのポーランド音楽の歴史がはじめての二章で詳しくまとめられ、まずその情報の量と密度に圧倒される。さらに残りの章では、ポーランド音楽の「ポーランド性」や新しい音楽の模索のあり方、オペラのジャンル、女性音楽家、亡命などのテーマが立てられ、ポ